

あとがき

本書は、筆者にとって、社会調査の歴史に関する二冊目の単著である。筆者は、二〇〇五年に、一八四八年前後から一九三三年にいたる八五年間のドイツにおける社会調査のダイナミックな展開とそこから生成する同国の経験的社会学の軌跡を叙述する『近代ドイツ社会調査史研究——経験的社会学の生成と脈動』（ミネルヴァ書房）を上梓した。本書は、前著のあとに筆者が、一九世紀中葉から世紀転換期の大陸ヨーロッパに視野を広げて、同時代のフランスのル・プレーとドイツのエンゲル、そしてヴェーバーの社会調査活動についておこなった、次のような研究が下地になっている。筆者は、前著の刊行と並行して、二〇〇三年から二〇〇六年にかけて、故阿部實（元日本社会事業大学教授）が代表をつとめる『現代的貧困・社会的排除と公的扶助政策の国際比較に関する総合的研究』（平成15～17年度科学研究費補助金B研究成果報告書）の研究分担者としてエンゲルの社会調査活動に関する社会調査史的研究に着手し、二〇〇六年の報告書に「エルンスト・エンゲル——官庁統計の革新と家計調査の展開」と題する論考を執筆した。また筆者は、二〇〇四年から、後藤隆（日本社会事業大学教授）が代表をつとめる『物語状态的データ分析の歴史的展開をふまえたフォーマライズのための基礎的研究』（平成16～18年科学研究費補助金B研究成果報告書）の研究分担者として、ル・プレーの社会調査活動に関する社会調査史的研究に着手し、二〇〇七年の報告書に「ル・プレーの家族モノグラフ——質的社会調査フォーマライズの源流」と題する論考を執筆した。その後、筆者は、社会調査家としてのル・プレーとエンゲルの生涯や家計調査をめぐる両者の交流に関する研究を続行し、これらの人々の社会調査活動に、質的調査と統計的調査の重要な萌芽があること、そして世紀転換期に社会改良家や政府の官吏、そして大学の若手研究者の間にひろがる社会調査の隆盛は、一九世紀中葉のかげらの活動に負うところが大きいことを明らかにした。本書の

第一部および第二部は、前著の刊行と前後して筆者がおこなった、フランスの社会改良家ル・プレーやドイツの官庁統計の実務家エンゲルの社会調査活動に関する以上のような研究が下地になっているのである。

また、筆者は、二〇一〇年の夏、『ヴェーバー研究会二一』から「マックス・ヴェーバーと社会調査」と題する報告を依頼され、前著でとりあげたヴェーバーの社会調査活動をかれの学問的生涯に即して再構成した報告原稿を執筆した(二〇一二「マックス・ヴェーバーと社会調査」釧路公立大学紀要『人文自然科学研究』第二四号一一四頁)。だが、二〇一一年三月に予定されていた研究会は、その直前の三月一日に発生した未曾有の東日本大震災によって延期になった。研究会は、翌二〇一二年三月一二日に、当初の計画どおりに東洋大学で開催された。したがって、同研究会からの報告依頼とその延期は、筆者にとつて、ヴェーバーの社会調査活動と再度、徹底的にむかい合う貴重な機会となった。この間に、筆者は、先の報告原稿に大幅な改定を加え、ヴェーバーが関心をよせたブランクの投票研究やレーフェンシュタインの社会心理学的アンケートおよびかれが単独で着手した織物労働調査については、調査のなりたちに加えて、その分析結果にもふみこんで整理し、前著には収録されていないアメリカ旅行のおりにかれが企てた「人間観察」、かれが最晩年の『社会学の根本概念』に残した社会調査活動を彷彿させる叙述を新たに追加した。そして、研究会の当日、筆者は、ヴェーバーの社会調査活動が現実科学としての社会科学の成立をめざす学問的営みだったことを、改訂した原稿に基づいて報告した。筆者は、「ヴェーバーと社会調査」という、いわゆるヴェーバー研究者の間では人気のないこのテーマで報告する貴重な機会を与えてくださった同研究会の共同発起人の中野敏男さん、荒川敏彦さん、宇都宮京子さん、鈴木宗徳さん、そして当日、コメントを引き受けてくださった城西大学の塚本成美さんをはじめ、全国から研究会に参加してくださった方々に深く感謝している。

また、同研究会の報告をふまえて、本書の執筆を開始した直後に、筆者は、北海道社会学会から会員の研究動向を紹介する「往来」欄の原稿を依頼され、ヴェーバーの学問的生涯の時期区分と、第三部でとりあげる社会調査に関連

する活動を網羅した「マックス・ヴェーバーの学問的生涯と社会調査」と題する論考（二〇一二『現代社会学研究』北海道社会学会第二五卷七三—八〇頁）を寄稿した。この論考は、第三部全体の骨格を構想するよい機会となった。したがって、本書は、前著の刊行と相前後して、筆者が科学研究費の研究分担者として、大陸ヨーロッパに視野をひろげておこなった、ル・プレーおよびエンゲルの社会調査活動に関する研究ならびに『ヴェーバー研究会二一』からの報告依頼を契機としておこなったヴェーバーの社会調査活動に関する新たな研究に基づくものである。

本書を構成する各章のなかには既発表の論文をもとにしたものもあるが、筆者は、一冊の書物としての体裁を整える観点から、新たな資料の追加や構成の組み換え、大幅な加筆修正と内容のみなおしをおこなった。

本書は、一九世紀中葉のフランスのル・プレーやドイツのエンゲル、世紀転換期のヴェーバーの社会調査活動を取りあげて、社会調査を受容する社会科学が生成していく道筋を叙述した社会調査史研究の成果である。昨年は、わが国の社会調査士の資格認定機関が発足して一〇年、本年は、ヴェーバー生誕一五〇年の節目の年をむかえる。社会調査の方法や技術の生成に加えて、調査を基盤とする社会科学の推進を阻害する軋轢や障壁について丁寧な叙述した本書が、新たな社会的現実挑戦する調査の学術化をめざす人々やヴェーバーを核にした新たな社会科学の発展に関心をよせる人々、そして、調査と社会科学の関係やその歴史に関心をよせる人々の道標となるなら、筆者にとって、これにまさる幸せはない。一冊の書物ができあがるまでには、たくさんの方々への援助や励ましがある。本書の刊行に際しては、お茶の水女子大学の杉野勇さんに、出版社との仲介の労をとっていただいた。法律文化社の掛川直之さんは、荒削りの草稿の段階から丁寧に読んでいただき、本書のタイトルや部の章題について貴重なご意見をたまわり、編集段階では、本書の読みやすさを考慮した丁寧な作業をしていただいた。また校正段階での大幅な加筆や訂正で印刷所の方々に多大なご苦勞をおかけした。記して感謝するしだいである。

二〇一四年九月一日　ゆく夏に

村上 文司